

の信者、即ち印度教徒に道を開いたとするのは、歴史的に、最も真に近い假説であり、佛教徒は、唯暫くの間、少くとも王室とその公教との中に於て、印度教に譲らねばならなかつた事と思ふ。何となれば、マヌ經論は、神として崇める王室の考を助くる上に、遙かに佛教經典に優れてゐるからである。兎も角、カンボヂアの過去の中に、我々にとつて新しい天地が開かれたのであり、凡て佛教史に關するもの程興味を惹くものはない。

既に以前からカンボヂアに於ける佛教の影響について、別々ではあるが確かに古い證據を得てゐる。例へば千九百十三年來、コマイユ氏が、バイヨンの南面の所で、成道の佛像を發見したが、其の専心の表情に見れば、印度の最も秀でた型のものと比する事を得るものである。同時に之は尨大な佛像で、真の大佛といへるが、テプ・プラナム Tep-Pranam の見晴しに散亂してゐたのを、舊の如く組立てたのである。然し殊に最近數年來の事であるが、恰も考古學にも時々流行でもあるかの如く、發掘で得るものは、佛教の影響をうけた彫刻であつた。然し掘出されたばかりのもので、佛陀の生涯中の事を現